

49 ドイツ人外科医ペルテス（一八六九—一九二七）の小伝と北清事変中の業績

蒲原 宏

小児股関節のペルテス病の提唱者ペルテス (Georg Clemens Perthes) は一八六九年一月一七日ドイツ・Düsseldorf 郊外の Mörs に生まれ、スイスの Davos で育った。Freiburg 大学、Berlin 大学で学び Bonn 大学で医師資格を一八九一年に取得した。直ちに同大学の外科学教授 F. Trendelenburg (1844-1924) の助手となるが、師の転出に従って Leipzig 大学に移る。一八九八年に教授資格試験に合格したが一九〇〇年から一九〇一年にわたり、北清事変のドイツ遠征軍の一員として中国で医療に従事し、帰国後一九〇三年に助教となる。

一九一〇年に P.V. Bruns (1846-1916) の後任として Tübingen 大学の外科主任教授となり、この年にペルテ

ス病と冠名される若年性変形性関節症 (Arthritis deformans juvenilis) をドイツ外科学会雑誌に報告した。

しかし、同年にアメリカの Arthur Legg (1874-1939) とフランスの Jacques Calvé (1857-1954) も報告している。現在では三人の名を冠した病名となっている。ペルテスは手の外科の専門分野でも拇指欠損に第二足趾移植を初めとする多くの拇指形成手術の先駆的な業績をあげている。また扁平足の治療、僧帽筋麻痺に対する新術式の開拓と同時に外科領域レントゲン学の確立と戦傷外科及び口腔外科、肺外科の業績を残している。一九二七年休暇のスキー旅行でスイスの Arosa に滞在中、一月三日の朝寢室で死亡しているのが発見された。後任には Martin Kirschner (1879-1942) が就任した。北清事変 (The Boxer Rebellion) に際して、日・独・英列国が清国天津で共同軍事行動を開始したのが一九〇〇年六月一〇日、北京陥落が八月一五日。ペルテスはドイツ第六極東野戦病院付先任軍医中尉資格で勤務した。

北京での診療は一九〇〇年十二月から一九〇一年八月までで、その間戦傷患者及び外科的疾患の診療体験をド

イツ外科学会雑誌 (Deutsche Zeitschrift für Chirurgie) 六三巻 一九〇二年に五回にわたり「北京からの報告」として連載している。既にX線撮影装置も携行され貴重な症例が報告されてある。中国における最初の骨X線撮影はペルテスが行ったと見てよいようである。その事績があまり知られていないので、その報告を紹介する。

第一報告「銃創について」(七五—一〇二頁)

1 無処置による創傷治癒、2 骨射創(銃創骨折)、3 盲管銃創の弾丸摘出、4 神経銃創(絹糸による断端縫合)、5 血管銃創、6 腹部貫通銃創

第二報告「異常な骨成長をうながした左手に発生した軟性線維腫の一症例(二〇三—一〇頁) Recklinghausen 病の三十歳中国人の症例で、骨のX線像も含めての報告。

第三報告「腸チフスに合併した肝膿瘍について」(一一—一八頁) 四症例の手術的治療経験についての報告である。

第四報告「熱帯性肝膿瘍について」(一一九—一三一

頁) 無菌性の急性肝膿瘍の三症例の手術治療についての詳細な報告である。腸チフス性・赤痢性・アメーバ性とも異なるものでドイツ人だけに発生した症例である。

第五報告「裂手・足」(一三二—一四八頁) 三十五歳中国人(北京在住)の四肢にみられた症例で、そのX線撮影像も添付してある。

ペルテスの北清事変の多くの戦傷患者治療の経験は、第一次世界大戦における軍陣外科の体験とあいまって手指の再建手術に新しい発想によるユニークな技術を開発していった。

また北京における戦傷による末梢神経損傷の治療経験はその後の末梢神経外科の進歩に大きな示唆を与えることになり、四肢の麻痺性障害の手術的療法に新術式を提唱することとなった。若き日のペルテスの東洋における戦傷患者体験が後年の大成に資するところが多々あったと考え、その活動の一端を紹介した。

(日本歯科大学医の博物館)